

令和 6 年度

知床半島先端部地区利用状況調査業務 報告書



令和 6（2024 年）12 月

公益財団法人 知床財団

報告書概要

業務名

令和 6 年度 知床半島先端部地区利用状況調査業務

業務目的

本業務は、知床国立公園の適正な利用を推進する上で必要な基礎データを収集することを目的とし、先端部地区を利用する利用者の動向を現地での聞き取り調査により把握した。

業務実施体制

本業務は、環境省からの請負業務として、公益財団法人 知床財団が実施した。

実施概要

(1) 入域調査

先端部地区利用者への聞き取り調査は、2024 年 7 月 20 日から 7 月 23 日及び 8 月 15 日から 8 月 18 日の計 8 日間行い、計 37 組 77 名から回答を得た。調査場所は、先端部地区の入り口である相泊の入林箱付近である。聞き取り項目は、グループ人数、年齢層、利用形態、移動経路と行動予定、ヒグマ対策の状況、ルサフィールドハウスへの立ち寄りの有無、知床半島先端部地区 利用の心得とその Web サイトである「シレココ」の認知状況である。

(2) 2020 年度から 2024 年度に実施した入域調査結果の取りまとめ

先端部地区利用者の動向を把握するための入域調査は、2020 年度から同様の形式で実施されており、2024 年度までの累計で 229 組を対象に聞き取りを実施している。本業務ではこれらのデータを統合し、①利用形態、②ヒグマ対策の有無、③ルサフィールドハウスへの立ち寄り状況、④利用の心得及びシレココの認知状況の 4 点に着目した経年推移を分析した。

(3) その他

業務実施中に「利用の心得」から逸脱した不適切な利用（不十分なヒグマ対策、たき火の実施、ゴミの投棄、番屋への宿泊、釣魚の投棄等）が認められた場合には、利用者に「利用の心得」について説明を行った。

また、業務実施中に、コース上の難所の状況変化（落石や崩落等）、ヒグマ出没情報等について確認した場合は記録を行うとともに、その情報をルサ FH に提供した。なお、これらの結果については、(1) 入域調査の結果と一体的に報告する体裁とした。

目次

はじめに 1

1. 先端部地区利用状況の調査方法..... 2

 1-1 調査方法 3

 1-2 2024 年度の調査期間の設定 3

2. 2024 年度の調査結果 4

 2-1 入域調査の結果..... 4

 2-2 分析結果 5

 2-3 その他実施項目..... 15

3. 2020 年度から 2024 年度における入域調査のとりまとめ 16

 3-1 分析結果 17

4. まとめと考察 25

資料編

巻末資料 1 2024 年度 知床半島先端部地区 利用状況調査表

巻末資料 2 2024 年度 知床半島先端部地区利用状況調査 入域調査の結果一覧

はじめに

知床半島先端部地区（以下「先端部地区」という。）は極めて原始性の高い自然環境と豊富な野生生物によって形成される多様な生態系が残されている地域であり、利用のための施設が設けられていないなど、一般の利用者による積極的な利用は想定されていない。一方で、知床ならではの質の高い自然体験の機会を求めて多様な利用者が訪れる場所でもあり、適正な利用と保全との両立を図ることが必要である。

環境省では、原始性の高い自然環境の保全と質の高い自然体験機会の提供を両立するため、レクリエーションを目的として先端部地区を利用する際のルール「知床半島先端部地区利用の心得」（以下、「利用の心得」という。）を定めるとともに、知床世界遺産ルサフィールドハウス（以下、ルサ FH という。）等の施設で先端部地区利用者へのレクチャーを実施している。さらに、知床半島先端部地区利用の心得 Web サイト、通称「シレココ」（以下、「シレココ」という。）を作成し普及活動に努めるなど、自然環境の保全を前提とした適切な先端部地区の利用を推進してきた。一方で近年、利用状況の変化や利用ニーズの多様化が指摘されており、実態を把握するための調査を行う必要性が高まってきている。

本業務は、知床国立公園の適正な利用の推進に必要な基礎データを収集するため、先端部地区を利用するトレッカーやカヤッカー、釣り人の動向を調査し、その結果についてまとめたものである。

1. 先端部地区利用状況の調査方法

先端部地区の利用状況を把握することを目的として、羅臼町相泊の海岸線トレッキング始点となる地点で入域調査を実施した（図 1）。調査方法や日程の設定については次項にまとめた。

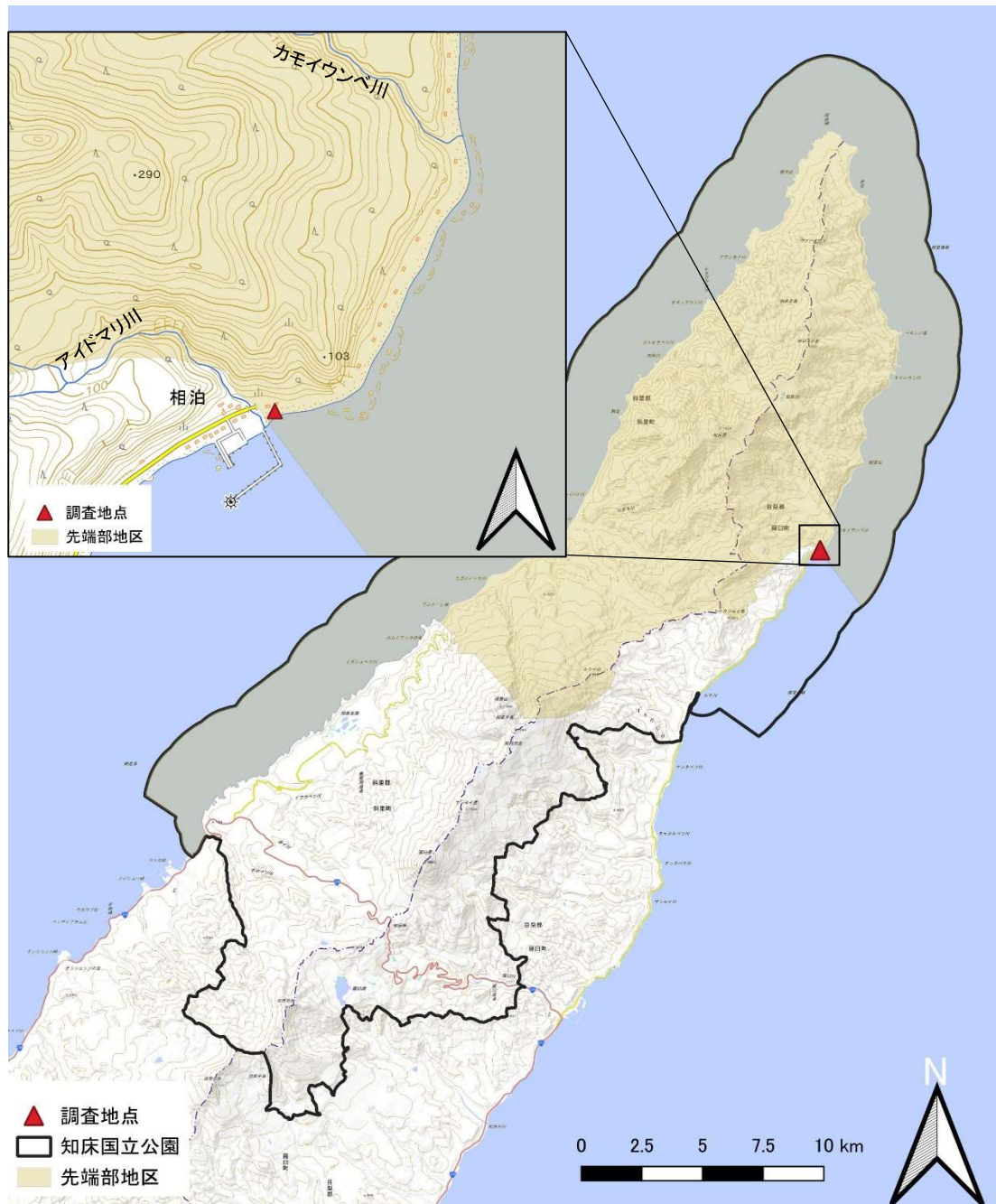


図 1 知床半島先端部地区の区域と利用状況調査の調査地点¹

¹ 国土地理院 (<https://www.gsi.go.jp/>)

1-1 調査方法

調査方法は、「トレッキング」、「シーカヤック」、「釣り」及び上記に該当しない先端部地区利用の形態「その他」と分類・定義し（表 1-1）、該当した利用者より聞き取りを行った。またレクリエーション目的ではない相泊へ来訪した人を来訪組数として目視でカウントを行った。

調査項目は、過年度からの項目に従い「グループ人数、年齢層、利用形態、移動経路と行動予定、ヒグマ対策の状況、ルサ FH への立ち寄りの有無（ルサ FH へ立ち寄りがあった場合、レクチャー受講の有無の確認。無かった場合、立ち寄らなかった理由を聞き取り。）、利用の心得及びシレココの認知状況」を基本事項とし、調査表を作成した（巻末資料 1）。

表 1-1 調査対象と利用形態別の定義

利用 形態	定義	調査 対象
トレッキング	カモイウンベ川以北に入域するトレッカー。	○
シーカヤック	相泊橋以北を利用するカヤッカー。SUP やゴムボート等を含む。	○
釣り	相泊橋以北で釣りをする人。	○
その他	上記に当てはまらない先端部利用の形態。 例：調査、取材等	○
来訪組数	レクリエーション目的ではない相泊へ来訪した利用者。組数ののみ目視カウント。	△

1-2 2024 年度の調査期間の設定

調査期間については、環境省担当官と協議の上、先端部地区のハイシーズンにあたる 7 月～8 月のうち大潮付近かつ利用者が多いと想定される各月 4 日間の計 8 日間に設定した（表 1-2）。また調査時間は 4:00～18:00 の 16 時間に定め、前半 4:00～11:00、後半 11:00～18:00 の 2 分割にし、それぞれ人員を 1 名ずつ配置した。

表 1-1 2024 年度の入域調査日程における月齢²と潮見表³

日付	曜日	月齢	満潮		干潮	
			時刻	潮位 (cm)	時刻	潮位 (cm)
7 月 20 日	土	14.2	0:22	121	8:57	7
7 月 21 日	日	15.2	1:21	127	9:40	4
7 月 22 日	月	16.2	2:16	132	10:19	3
7 月 23 日	火	17.2	3:09	132	10:54	6
8 月 15 日	木	10.7	21:35	111	6:09	30
8 月 16 日	金	11.7	22:54	116	7:22	22
8 月 17 日	土	12.7	-	-	8:08	15
8 月 18 日	日	13.7	0:10	122	8:46	11

*19 時頃の月齢を示す。満月の月齢が 15 前後とされている。

*満干潮が存在しない場合は、「-」としている。

2. 2024 年度の調査結果

2-1 入域調査の結果

先端部地区利用者を対象とした入域調査は、計 8 日間実施し 37 組 77 名より回答を得た（表 2-1）。調査期間中、天気は安定していたが風が強い日が多く、前年度に比べ回答数が減少した（2023 年度 51 組 143 名）。また目視で確認した来訪組数は 94 組であった。

表 2-1 2024 年度の入域調査の実施結果

日付	天気	調査時間		データ	データ
		開始	終了	取得数	取得人数
7 月 20 日	曇	4:00	18:00	4	7
7 月 21 日	曇	4:00	18:00	3	8
7 月 22 日	晴	4:00	18:00	0	0
7 月 23 日	曇/晴	4:00	18:00	4	6
8 月 15 日	曇/晴	4:00	18:00	8	23
8 月 16 日	晴/雨	4:00	18:00	11	23
8 月 17 日	雨/曇	4:00	18:00	4	7
8 月 18 日	雨/曇	4:00	18:00	3	3

² ウェザーニュース (https://weathernews.jp/s/star/moon_calendar.html)

³ 気象庁 (<https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/db/tide/suisan/suisan.php>)

2-2 分析結果

利用形態別の回答組数は、トレッキング 18 組 42 名、シーカヤック 2 組 4 名、釣り 17 組 31 名であった（表 2-2）。利用形態の割合は、トレッキングが 48.6%と最も高く、次いで釣りが 45.9%と同程度で、シーカヤックが 5.4%と一桁台であった（図 2-1）。なお、2024 年度はその他の利用形態が確認されなかったため、以降よりその他を除外し分析を行った。

表 2-2 利用形態別の聞き取り調査結果

日付	トレッキング		シーカヤック		釣り		その他		全体	
	(組)	(人)	(組)	(人)	(組)	(人)	(組)	(人)	(組)	(人)
7 月 20 日	1	1	1	2	2	4	0	0	4	7
7 月 21 日	2	3	0	0	1	5	0	0	3	8
7 月 22 日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7 月 23 日	4	6	0	0	0	0	0	0	4	6
8 月 15 日	3	13	1	2	4	8	0	0	8	23
8 月 16 日	7	17	0	0	4	6	0	0	11	23
8 月 17 日	1	2	0	0	3	5	0	0	4	7
8 月 18 日	0	0	0	0	3	3	0	0	3	3
合計	18	42	2	4	17	31	0	0	37	77

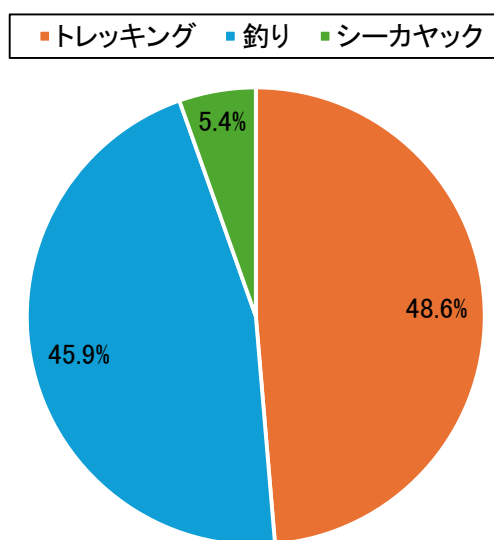


図 2-1 利用形態別の割合（組）

2-2-1 組ごとのグループサイズ

組ごとのグループサイズは、1名のみを単独、2～4名を小グループ、5～7名を中グループ、8名以上を大グループの4つに分類した。全体で最も組数の多かったグループサイズは、小グループの21組で、次いで単独の14組、中グループ以上のグループサイズは少なく、大グループは確認されなかった（表2-3）。

利用形態別のグループサイズの割合は、トレッキングが単独33.3%、小グループ61.1%、中グループ5.6%と小グループの割合が高かった。シーカヤックは小グループのみの構成で、釣りは単独と小グループの割合が47.1%と同様であり、中グループが5.9%であった（図2-2）。

表 2-3 利用形態別グループサイズごとの組数

利用形態 (組)	グループサイズ				合計
	単独	小グループ (2～4名)	中グループ (5～7名)	大グループ (8名以上)	
トレッキング	6	11	1	0	18
シーカヤック	0	2	0	0	2
釣り	8	8	1	0	17
合計	14	21	2	0	37

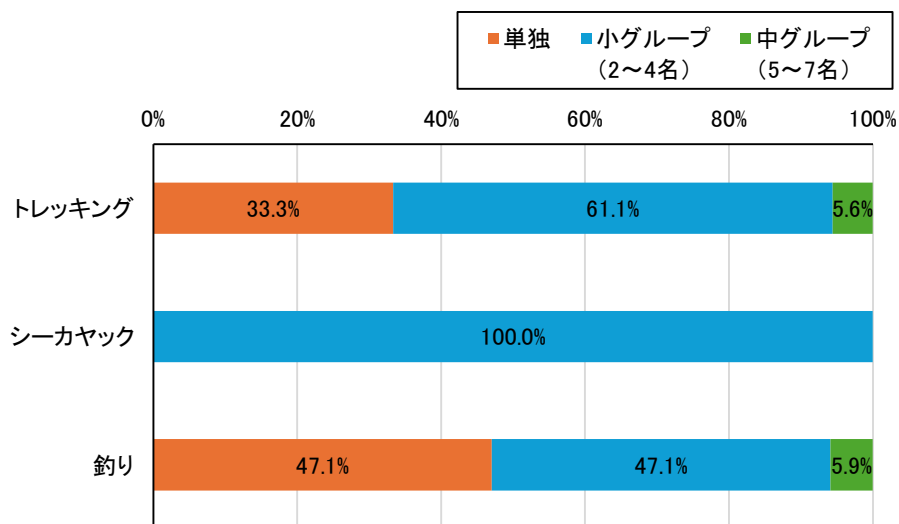


図 2-2 利用形態別グループサイズの割合

2-2-2 利用者数の年代

利用者の年代は、利用形態ごとの人数で集計を行った。全体で最も多かった年代は20代の27人で、30代～50代は15人前後、10代や60代以上の利用者は少なかった（表2-4）。

利用形態別の割合で最も高かったのは、トレッキングが20代、シーカヤックが30代、釣りが20代と40代であった（図2-3）。トレッキングやシーカヤックは利用する年代にばらつきが見られたが、釣りは比較的ばらつきが少ない傾向であった。

表 2-4 利用形態別の利用者の年代

利用形態 (人)	年代							合計
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代 以上	
トレッキング	1	19	4	6	8	3	1	42
シーカヤック	0	0	2	1	1	0	0	4
釣り	0	8	6	8	7	1	1	31
合計	1	27	12	15	16	4	2	77

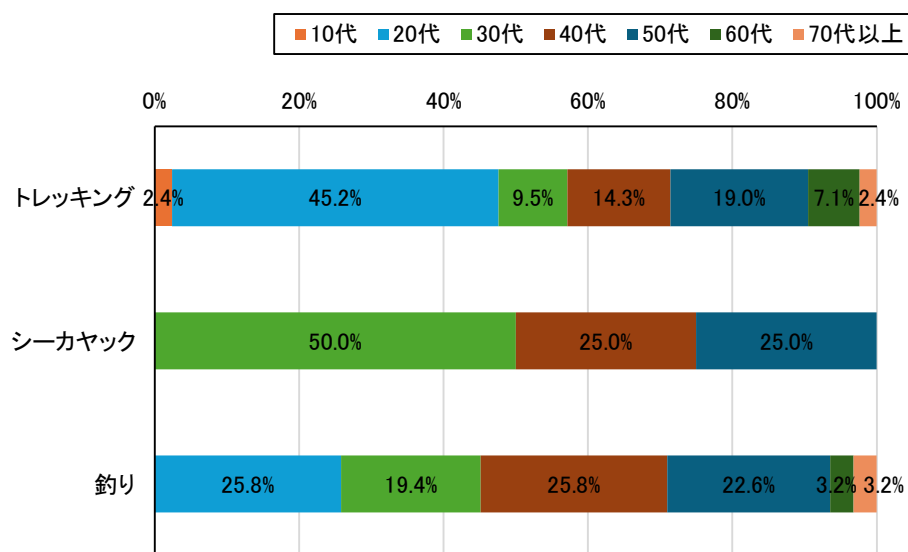


図 2-3 利用形態別グループサイズの割合

2-2-3 ヒグマ対策の状況

利用形態別にヒグマ対策の有無を表 2-5 に示した。多くの利用者がヒグマ対策を講じていたが、トレッキング利用者では、ヒグマ対策をしていない割合が 33.3%と他の利用形態よりもヒグマ対策を講じていなかった（図 2-4）。

ヒグマ対策を講じていた 11 組では、クマ対策スプレーの所持率が 40.0%、クマ鈴の所持率が 41.8%となり、クマ鈴の所持率がわずかにクマ対策スプレー上回っており、この 2 つのヒグマ対策グッズが全体の 8 割ほどを占める結果であった（表 2-6）。

表 2-5 利用形態別のヒグマ対策の状況

利用形態 (組)	ヒグマ対策の状況		合計
	あり	なし	
トレッキング	12	6	18
シーカヤック	2	0	2
釣り	17	0	17
合計	31	6	37

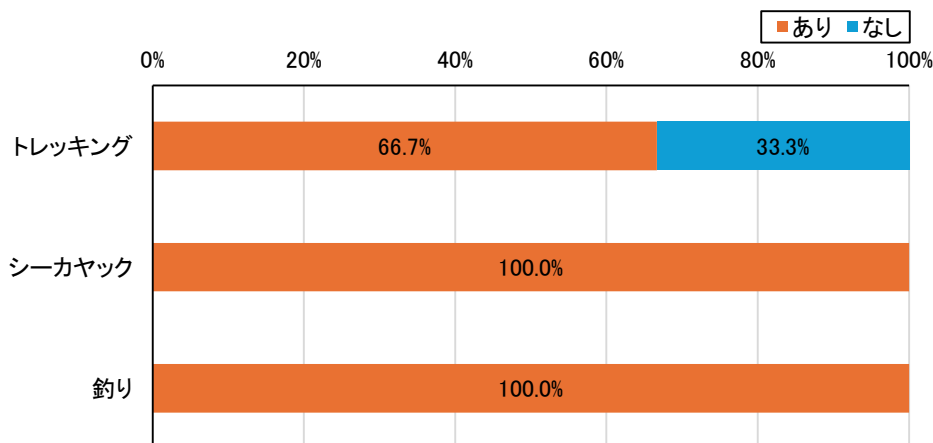


図 2-4 利用形態別のヒグマ対策の割合

表 2-6 利用形態別のヒグマ対策グッズ一覧

利用形態 (組)	ヒグマ対策グッズ一覧					合計
	クマスプレー	フードコンテナ	クマ鈴	笛	その他	
トレッキング	9	1	7	3	1	21
シーカヤック	1	0	2	1	0	4
釣り	12	0	14	2	2	30
合計	22	1	23	6	3	55
割合	40.0%	1.8%	41.8%	10.9%	5.5%	1

*その他内訳：催涙スプレー、爆竹、ロケット花火

2-2-4 ルサ FH の立ち寄り組数とレクチャー受講

ルサ FH の立ち寄り及びレクチャー受講の有無を利用形態別に表 2-7 に示した。トレッキングは 44.6%がルサ FH に立ち寄っているが、レクチャーを受講した組は 33%に低下した。シーカヤックはルサ FH への立ち寄り及びレクチャー受講はなかった。釣りはルサには立ち寄っている利用者が 12.5%いたが、レクチャー受講は 0%であった（図 2-5）。

またルサ FH への立ち寄りとレクチャー受講しなかった理由を抜粋し以下に記述する。

<ルサ FH への立ち寄り>

- 昨年、立ち寄ったため。（トレッキング、釣り）
- 施設の存在を知らなかったため。（トレッキング、釣り）
- 知床羅臼ビジターセンターでレクチャーを受講したため。（トレッキング）
- ガイドツアーに参加しているため。（シーカヤック）
- ルサ FH が火曜日休館のため。（シーカヤック、釣り）
- 釣りが目的のため。（釣り）
- これまで何度も立ち寄ったことがあるから。（釣り）

<レクチャー受講>

- 昨年、レクチャーを受講したことがあるため。（トレッキング）
- 過去に何度かシーカヤックで知床半島を周回したことがあるため。（シーカヤック）
- ルサ FH で釣りの情報を得ているが、レクチャーとしては聞いていない。（釣り）

表 2-7 利用形態別のルサ FH への立ち入り及びレクチャー受講状況

利用形態 (組)	ルサ FH への立ち寄り				レクチャー受講			
	有	無	不明	合計	有	無	不明	合計
トレッキング	8	10	0	18	6	12	0	18
シーカヤック	0	2	0	2	0	2	0	2
釣り	2	14	1	17	0	16	1	17
合計	10	26	1	37	6	30	1	37

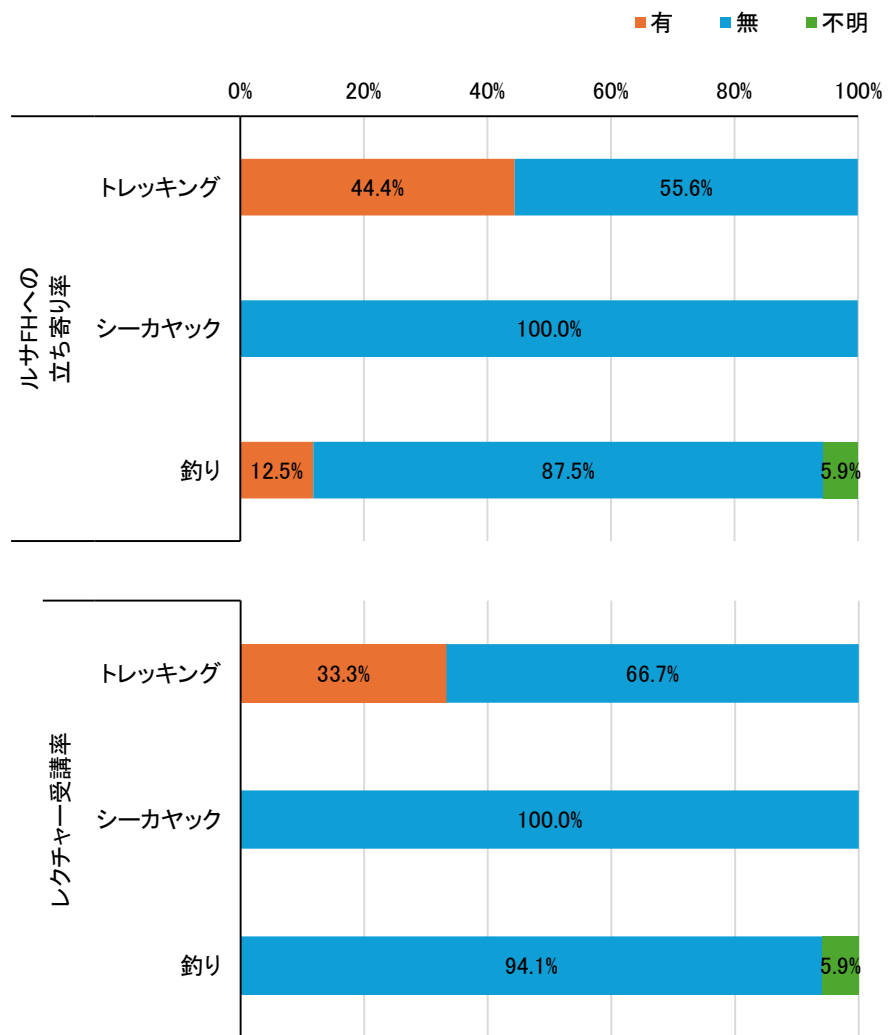


図 2-5 ルサ FH への立ち入り及びレクチャー受講状況の割合

2-2-5 利用の心得及びシレココの認知状況の組数

利用の心得及びシレココの認知状況の組数を表 2-8 に示す。利用形態別で認知している
と回答した割合は、トレッキング 55.6%、シーカヤック 100%、釣り 5.9%とトレッキング
とシーカヤック利用者の認知度は高い傾向にあった（図 2-6）。

認知していない利用者には、利用の心得及びシレココの周知を行った。

表 2-8 利用形態別の利用の心得及びシレココの認知状況の組数

利用形態 (組)	認知の有無			合計
	あり	なし	不明	
トレッキング	10	8	0	18
シーカヤック	2	0	0	2
釣り	1	13	3	17
合計	13	21	3	37

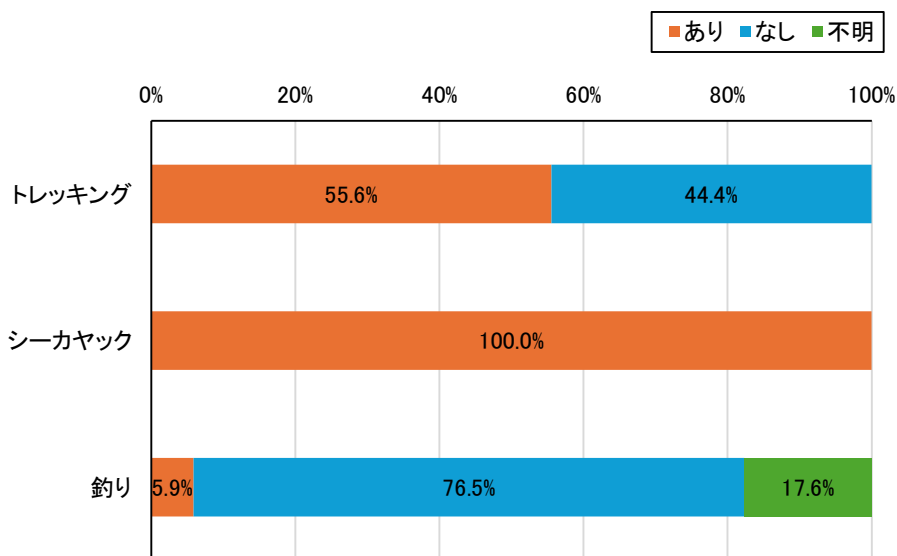


図 2-6 利用形態別の利用の心得及びシレココの認知状況の割合

2-2-6 利用者の移動経路と野営地点

先端部地区利用者の移動経路と野営地点を表 2-8 に示す。本調査においてはトレッキング利用者の 6 泊 7 日が最大日数として確認されており、その移動経路は斜里側から出発し、羅臼相泊港を終点した経路であった。

他の移動経路として、トレッキングは相泊 - 観音岩間の日帰り利用と相泊 - 知床岬間の 2 泊または 3 泊の利用が確認された。シーカヤックは赤岩やペキンの鼻等を野営地点とした利用が確認され、最大 3 泊であった。釣りは全てが日帰り利用であり、主にカモイウンベ川とクズレハマ川に訪れていた。

表 2-8 組毎の先端部地区利用者の移動経路と野営地点

No.	日付	形態	人数	滞在 日数	野営地点							
					0泊	1泊目	2泊目	3泊目	4泊目	5泊目	6泊目	
1	7月23日	トレッキング	2	1	カモイウンベ川							
2	7月23日	トレッキング	2	1	クズレハマ川							
3	7月23日	トレッキング	1	1	クズレハマ川							
4	8月16日	トレッキング	1	1	カモイウンベ川							
5	8月16日	トレッキング	4	1	観音岩							
6	8月16日	トレッキング	1	1	観音岩							
7	8月16日	トレッキング	2	1	観音岩							
8	8月18日	トレッキング	3	1	不明							
9	7月20日	トレッキング	1	2		赤岩						
10	7月21日	トレッキング	1	2		赤岩						
11	7月21日	トレッキング	2	3		二本滝	二本滝					
12	7月23日	トレッキング	1	3		二本滝	二本滝					
13	8月15日	トレッキング	4	3		二本滝	二本滝					
14	8月16日	トレッキング	4	3		ペキンの鼻	タケノコ岩					
15	8月15日	トレッキング	3	4		近藤ヶ淵	二本滝	メガネ岩				
16	8月16日	トレッキング	2	4		二本滝	二本滝	モイレウシ				
17	8月15日	トレッキング	6	5		ペキンの鼻	二本滝		モイレウシ			
18	8月17日	トレッキング	2	7		タキノ川	レタラワラタ	文吉湾	滝川	赤岩	モイレウシ	
19	8月15日	シーカヤック	2	3		不明	赤岩					
20	7月20日	シーカヤック	2	4		赤岩	赤岩	ペキンの鼻				
21	7月20日	釣り	2	1	カモイウンベ川							
22	7月20日	釣り	2	1	カモイウンベ川							
23	7月21日	釣り	5	1	クズレハマ川							
24	8月15日	釣り	1	1	カモイウンベ川							
25	8月15日	釣り	4	1	クズレハマ川							
26	8月15日	釣り	1	1	カモイウンベ川							
27	8月15日	釣り	2	1	クズレハマ川							
28	8月16日	釣り	1	1	カモイウンベ川							
29	8月16日	釣り	2	1	カモイウンベ川							
30	8月16日	釣り	1	1	カモイウンベ川							
31	8月16日	釣り	2	1	カモイウンベ川							
32	8月17日	釣り	2	1	不明							
33	8月17日	釣り	1	1	不明							
34	8月17日	釣り	2	1	クズレハマ川							
35	8月18日	釣り	1	1	カモイウンベ川							
36	8月18日	釣り	1	1	カモイウンベ川							
37	8月18日	釣り	1	1	カモイウンベ川							

移動経路より野営地点ごとの訪問頻度を抽出し表 2-9 に示した。トレッキングの多くは二本滝、シーカヤックは赤岩、釣りはカモイウンベ川が最多であった。全体で見るとカモイウンベ川と二本滝に利用が集中していることが分かった（図 2-7）。

表 2-9 野営地点別訪問回数（組数）

目的地	トレッキング	シーカヤック	釣り	合計	備考
カモイウンベ川	2	0	11	13	
クズレハマ川	2	0	4	6	日帰りのみ
観音岩	3	0	0	3	
タケノコ岩	1	0	0	1	
モイレウシ	3	0	0	3	
メガネ岩	1	0	0	1	
ペキンの鼻	2	1	0	3	
近藤ヶ淵	1	0	0	1	
滝川	1	0	0	1	
二本滝	11	0	0	11	
赤岩	3	3	0	6	
文吉湾	1	0	0	1	
レタラワラタ	1	0	0	1	
タキノ川	1	0	0	1	
不明	1	3	0	4	

*訪問回数が最も多かった地点をオレンジ色に網掛け。なお不明は除く。

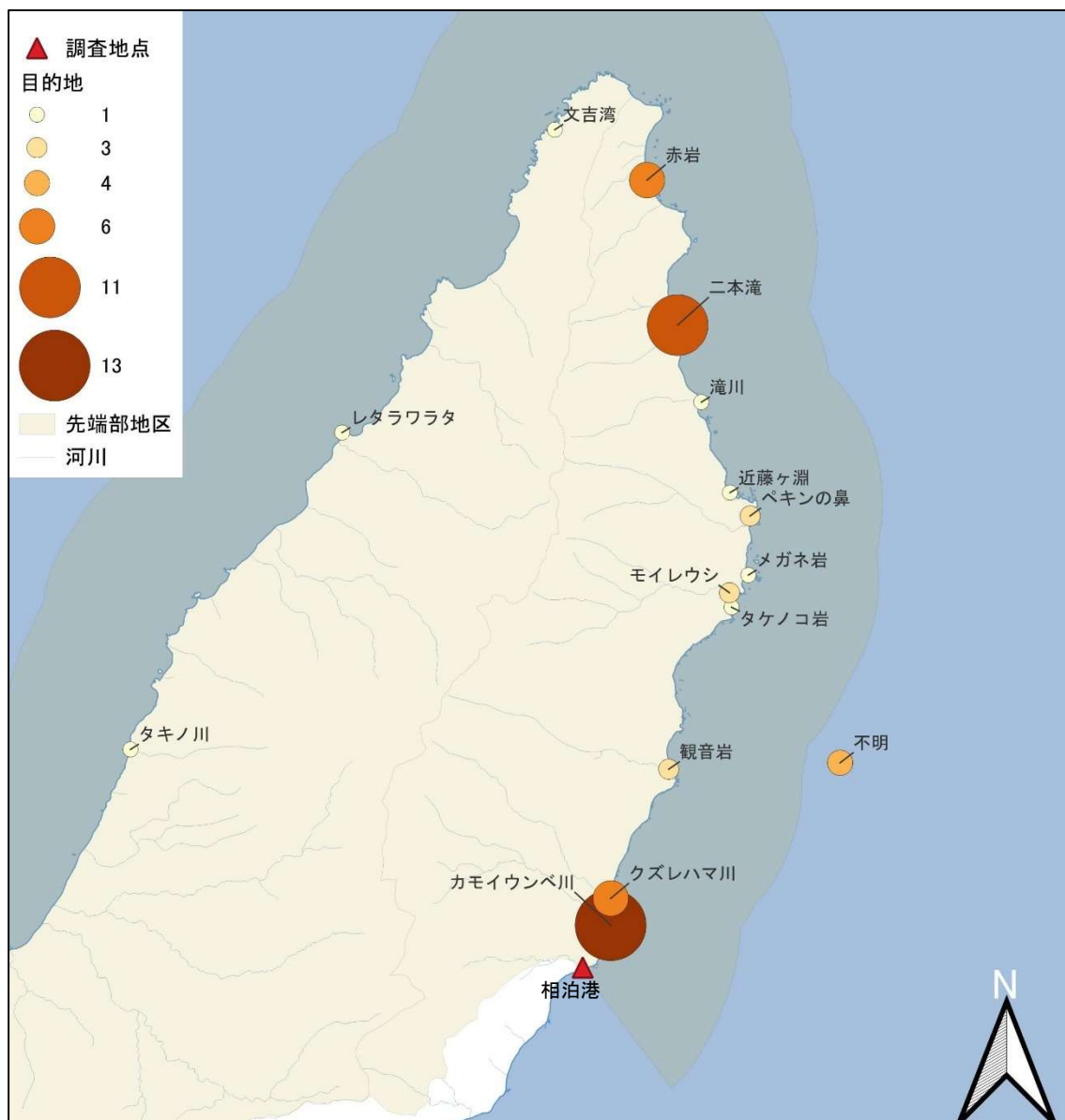


図 2-7 組毎の目的地訪問回数の地図
(目的地「不明」のポイントを海域に設定)

2-3 その他実施項目

2-3-1 利用者指導

調査実施にあたっては、「利用の心得」から逸脱した不適切な利用（不十分なヒグマ対策、たき火の実施や不始末、番屋への宿泊、釣魚の投棄等）が認められた場合に利用者指導を行った。今年度の調査期間では、1件のみ確認され、二本滝番屋前に泊まろうとした利用者へ指導を行った。

2-3-2 ヒグマ情報について

利用者からヒグマの目撃があった場合は、聞き取りを行い、速やかに羅臼町及び知床財団へ通報を行った。今年度の調査期間では、赤岩付近で2件の目撃情報があった。

2-3-3 入林簿の記載

利用形態別の入林簿の記載状況を表2-10、図2-8に示す。入林簿の記載は、トレッキングが27.8%、シーカヤックが50.0%、釣りが0%であった。トレッキングの割合が低い理由として、カモイウンベ川から観音岩間を利用する日帰りのトレッカーのほとんどが入林簿に記載を行わなかったためである。

表2-10 利用形態別の入林簿の記載状況

利用形態 (組)	入林簿の記載状況			合計
	記載	非記載	不明	
トレッキング	5	10	3	18
シーカヤック	1	1	0	2
釣り	0	16	1	17
合計	6	27	4	37

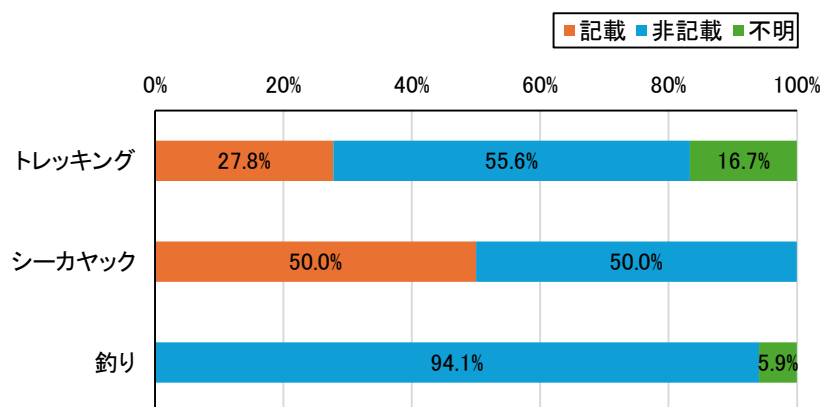


図2-8 利用形態別の入林簿の記載の割合

3. 2020 年度から 2024 年度における入域調査のとりまとめ

先端部地区の利用状況を把握するため、先端部地区利用者を対象に 2011 年度から 2020 年度にかけてカラフトマス釣りの瀬渡し船を利用した船舶調査を実施しており、10 年間で 60 組のデータが収集されてきた⁴。しかし、年間平均 6 組と得られるデータ数と調査努力量がつり合わない現状であったため、2020 年度から船舶調査と並行し、先端部地区の始点である相泊での入域調査を開始した。船舶調査と比較し、入域調査の聞き取り件数が多かったことから、本調査は 2021 年度より入域調査にシフトした（表 3）。

本章では、入域調査を開始した 2020 年度から 2024 年度に得られた 229 組の調査データを「トレッキング」、「シーカヤック」、「釣り」に整理・分類し、①利用形態の経年変化、②ヒグマ対策の状況、③ルサ FH への立ち入り状況、④ルサ FH でのレクチャー受講状況、⑤利用の心得及びシレココの認知状況の 5 つの項目で分析を行った。結果は次項に示す。

表 3 2020 年度からの調査概要と変遷

実施年	期間	日数	聞き取り 組数	調査の変遷
2020 年度	7 月 21 日～7 月 25 日	5 日	27	2011 年から継続していた船舶調査に加え、相泊付近での入域調査を開始。
2021 年度	7 月 22 日～7 月 25 日 8 月 7 日～8 月 10 日	8 日	47	2021 年度より船舶調査が終了し、相泊付近での入域調査のみ継続。
2022 年度	7 月 29 日～7 月 31 日 8 月 11 日～8 月 14 日	8 日	67	
2023 年度	7 月 29 日～7 月 31 日 8 月 11 日～8 月 14 日	8 日	51	調査項目の「目的地」を「移動経路」に変更。ルサ FH でのレクチャー受講の有無を追加。
2024 年度	7 月 20 日～7 月 23 日 8 月 15 日～8 月 18 日	8 日	37	

⁴ 令和 2 年度 知床半島先端部地区利用状況調査業務
(https://shiretokodata-center.env.go.jp/data/research/report/r02/R02_sentanchiku_riyou.pdf)

3-1 分析結果

3-1-1 利用形態別の経年変化

利用形態別の経年変化を表 3-1 に示した。トレッキング利用者は 2022 年を除き、10 組以上が利用している状況であり、2024 年度は過去最多の 18 組の利用が確認された。シーカヤック利用者は 10 組以下の利用で推移しており、大きな変化は確認されなかったが、2024 年度は 2 組と最も少ない利用であった。釣り利用者は、2020 年度から 2022 年度にかけて増加したが、2023 年度より減少傾向に転じた（図 3-1）。

表 3-1 利用形態別の経年変化

	トレッキング (組)	シーカヤック (組)	釣り (組)	合計 (組)
2020 年度	11	6	10	27
2021 年度	15	4	28	47
2022 年度	7	4	56	67
2023 年度	10	7	34	51
2024 年度	18	2	17	37
合計	61	23	145	229

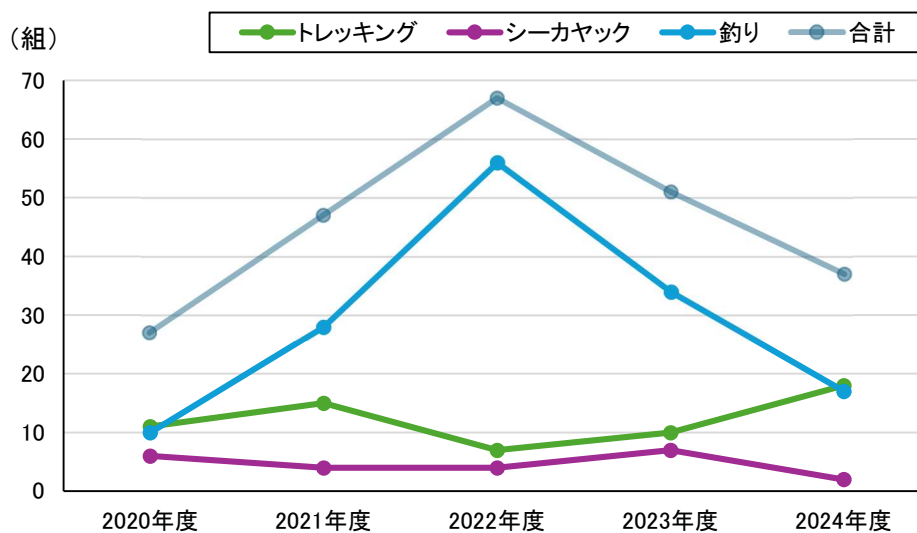


図 3-1 利用形態別の経年変化（2020 年度～2024 年度）

3-1-2 ヒグマ対策の状況

ヒグマ対策状況の経年変化を表 3-2 に示した。ヒグマ対策は、2022 年度が 55 組と最多であったのに対し、ヒグマ対策なしと回答した組数も 12 組と最多であった。しかし割合で見ると 2022 年度以降はヒグマ対策をしている組の割合が 80%以上であり、ここ 3 年はヒグマ対策をする利用者の割合が増加している（図 3-2）。

表 3-2 ヒグマ対策状況の経年変化

	あり (組)	なし (組)	不明 (組)
2020 年度	18	5	4
2021 年度	34	12	1
2022 年度	55	12	0
2023 年度	48	3	0
2024 年度	31	6	0

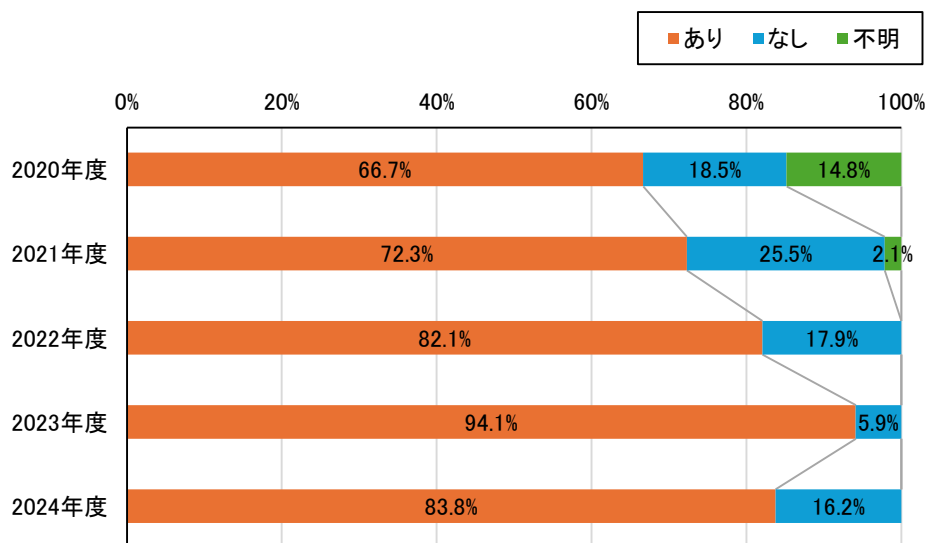


図 3-2 ヒグマ対策の経年変化の割合（2020 年度～2024 年度）

3-1-3 ルサフィールドハウスの立ち寄り状況

ルサ FH の立ち入り状況の経年変化を表 3-3 に示した。全体としてルサ FH に立ち寄っている利用者より、立ち寄っていない利用者が多かった。

以下からは利用形態別の経年変化の割合の結果を示す。

表 3-3 ルサ FH の立ち入り状況の経年変化

	トレッキング(組)			シーカヤック(組)			釣り(組)			合計		
	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明
2020 年度	6	5	0	2	4	0	0	6	4	8	15	4
2021 年度	6	9	0	1	3	0	2	25	1	9	37	1
2022 年度	7	0	0	2	2	0	17	38	1	26	40	1
2023 年度	4	6	0	2	5	0	2	32	0	8	43	0
2024 年度	8	10	0	0	2	0	2	14	1	10	26	1

<トレッキング>

トレッキング利用者におけるルサ FH への立ち入り状況の経年変化の割合を図 3-3 に示す。2022 年度の 100%を除き、概ね 40~50%の推移でルサ FH に立ち寄っている状況である。

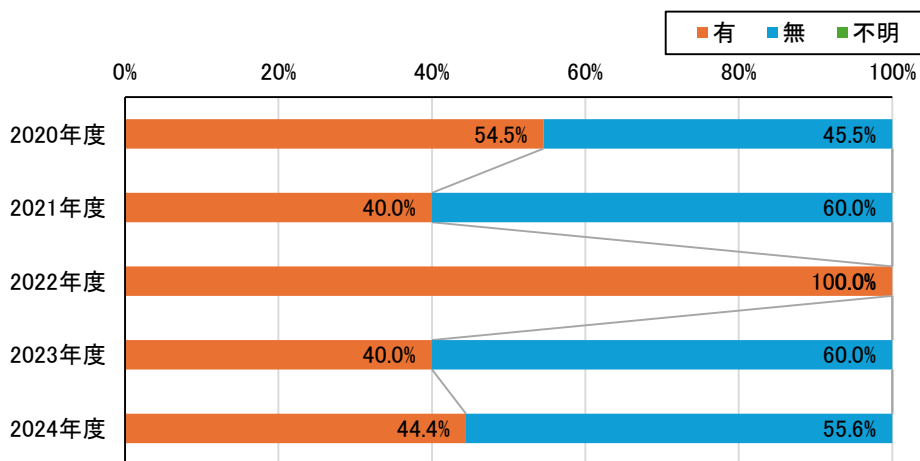


図 3-3 トレッキング利用者におけるルサ FH への立ち入り状況の経年変化の割合
(2020 年度～2024 年度)

<シーカヤック>

シーカヤック利用者におけるルサ FH への立ち入り状況の経年変化の割合を図 3-4 に示す。2024 年度のルサ FH への立ち入り 0%を除き、20~30%以上がルサへ立ち寄っている。2022 年には 50%がルサへ立ち寄っているが、年度により立ち入り状況が大きく異なり、不安定である。

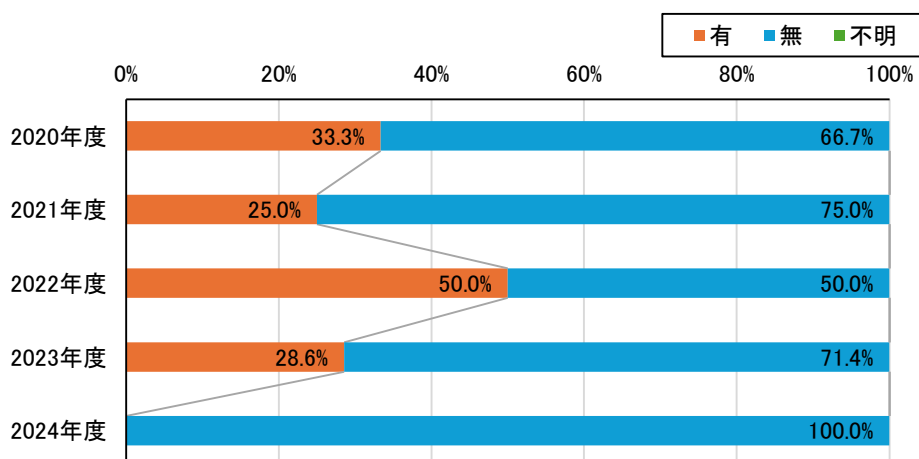


図 3-4 シーカヤック利用者におけるルサ FH への立ち入り状況の経年変化の割合
(2020 年度～2024 年度)

<釣り>

釣り利用者におけるルサ FH への立ち入り状況の経年変化の割合を図 3-5 に示す。釣り利用者は 10%ほどがルサ FH へ立ち寄っている状況で、トレッキングやシーカヤック利用者に比べ、ルサ FH への立ち入りの割合が低い傾向にあった。しかし、2022 年には釣り利用者の 30.4%がルサ FH へ立ち寄り、シーカヤックの割合と同程度であった。

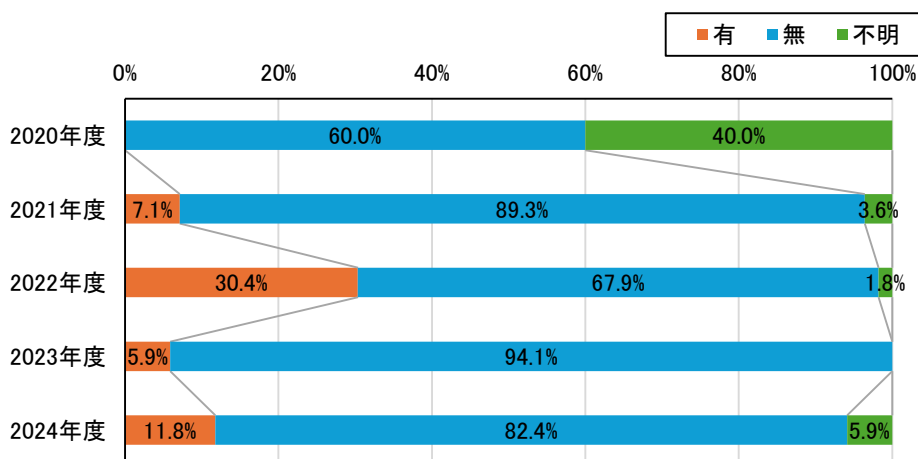


図 3-5 シーカヤック利用者におけるルサ FH への立ち入り状況の経年変化の割合
(2020 年度～2024 年度)

3-1-4 ルサフィールドハウスでのレクチャー受講率の経年変化

ルサ FH のレクチャー受講率の経年変化を表 3-4 に示した。レクチャー受講は 2023 年度より調査項目に追加されていることもあり、2 か年を示している。合計で見れば、レクチャーを受講していない利用者がほとんどであり、レクチャーを受講した組数に変化はなかった。

以下からは利用形態別の経年変化の割合の結果を示す。

表 3-4 ルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化

	トレッキング(組)			シーカヤック(組)			釣り(組)			合計		
	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明
2023 年度	4	6	0	2	5	0	0	34	0	6	45	0
2024 年度	6	12	0	0	2	0	0	16	1	6	30	1

<トレッキング>

トレッキング利用者におけるルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化の割合を図 3-6 に示す。2023 年度に比べ、2024 年度のレクチャー受講率は 6.7%減となった。しかし、レクチャー受講率は 30%を超えており、他の利用形態に比べ高い割合であった。

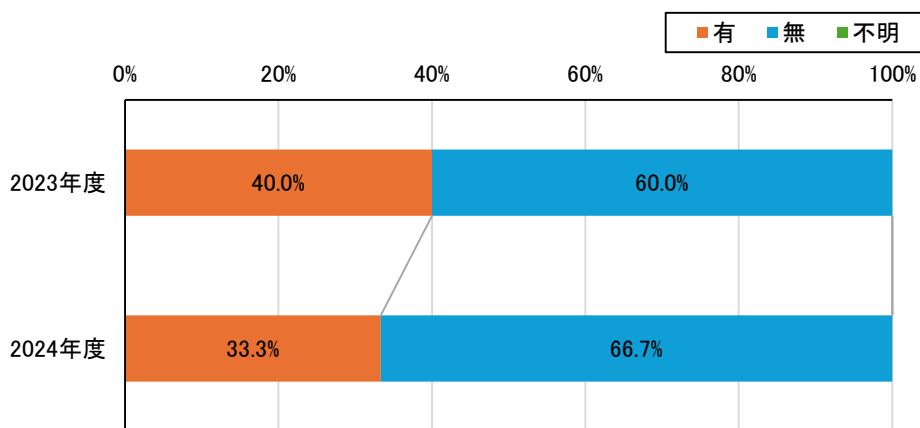


図 3-6 トレッキング利用者におけるルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化の割合
(2023 年度～2024 年度)

<シーカヤック>

シーカヤック利用者におけるルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化の割合を図 3-7 に示す。2023 年度のレクチャー受講率は 28.6%であったが、2024 年度には 0%であった。今年 は 2 組のシーカヤック利用者に入域調査を行ったが、どちらも過去に何度か先端部を利用 していることが分かっている。

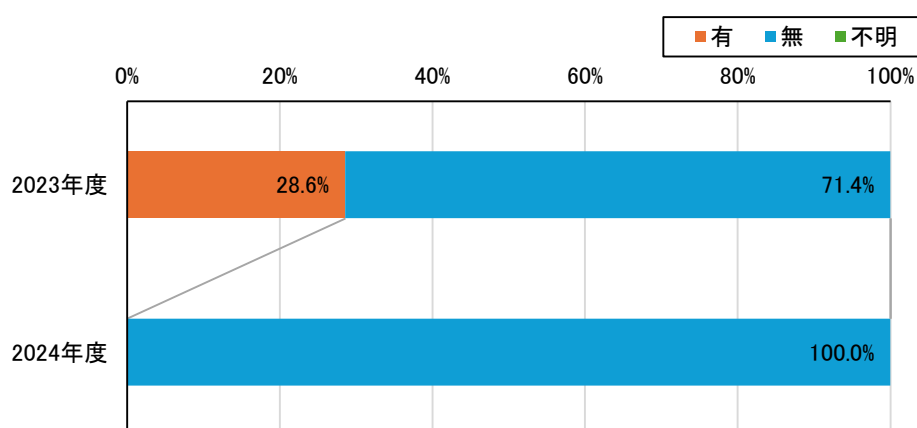


図 3-7 トレッキング利用者におけるルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化の割合
(2023 年度～2024 年度)

<釣り>

釣り利用者におけるルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化の割合を図 3-8 に示す。2023 年度～2024 年度のレクチャー受講率は 0%であり、利用形態別に見れば、最も低い割合であった。

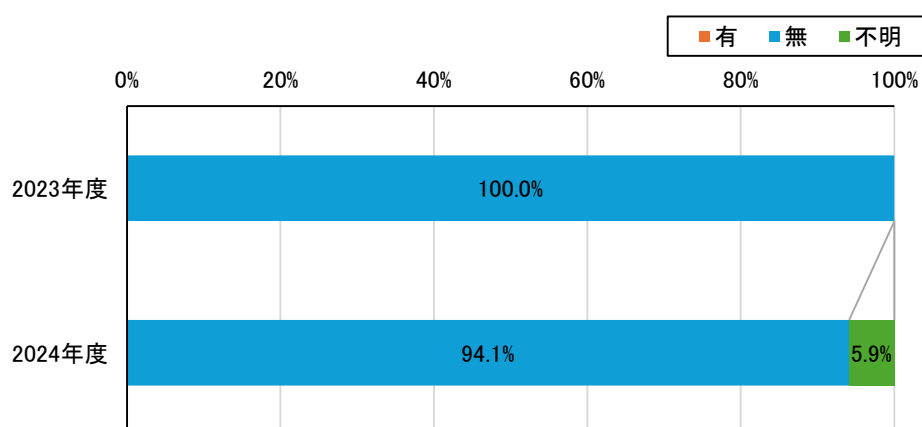


図 3-8 トレッキング利用者におけるルサ FH でのレクチャー受講率の経年変化の割合
(2023 年度～2024 年度)

3-1-5 利用の心得及びシレココの認知状況

利用の心得及びシレココの認知状況の経年変化を表 3-5 に示した。全体では 2020 年度から 2022 年度までの認知状況は良かったが、2023 年度より認知している組数が大幅に減少した。

以下からは利用形態別の経年変化の割合の結果を示す。

表 3-5 利用の心得及びシレココの認知状況の経年変化

	トレッキング(組)			シーカヤック(組)			釣り(組)			合計		
	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明	有	無	不明
2020 年度	8	1	2	5	1	0	0	5	5	13	7	7
2021 年度	7	8	0	4	0	0	6	21	1	17	29	1
2022 年度	7	0	0	2	2	0	10	45	1	19	47	1
2023 年度	7	3	0	7	0	0	4	30	0	18	33	0
2024 年度	6	12	0	2	0	0	0	17	0	8	29	0

<トレッキング>

トレッキング利用者における利用の心得及びシレココの認知状況の経年変化の割合を図 3-9 に示す。認知状況だが、割合が高い年度で 2022 年度に 100%、低い割合で 2024 年度に 33.3%であり、年度によりばらつきが大きい結果となった。

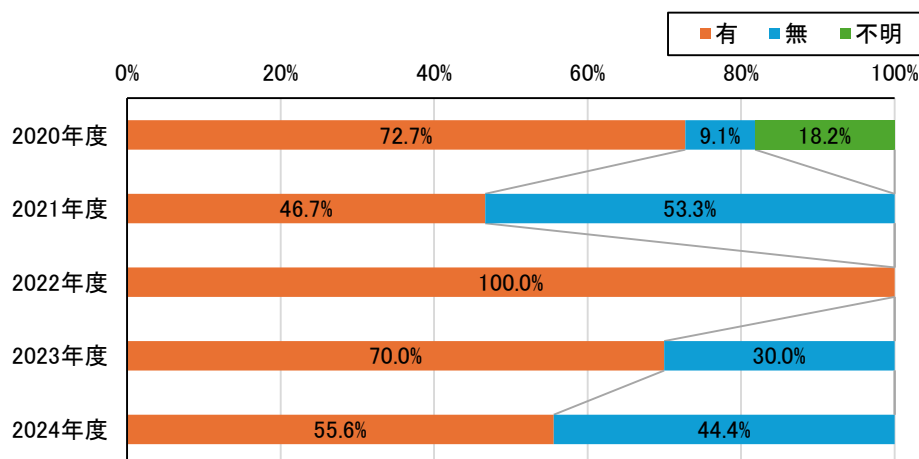


図 3-9 トレッキング利用者における利用の心得及びシレココの経年変化の割合
(2020 年度～2024 年度)

＜シーカヤック＞

シーカヤック利用者における利用の心得及びシレココの認知状況の経年変化の割合を図 3-10 に示す。先端部地区を利用するシーカヤック利用者の多くが利用の心得及びシレココを認知している結果となった。しかし、2022 年度は 50%の認知状況であり、原因は不明である。

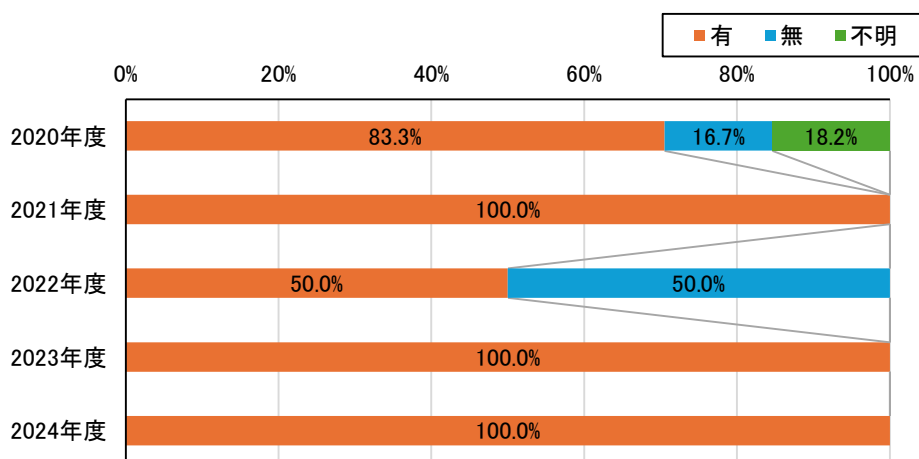


図 3-10 シーカヤック利用者における利用の心得及びシレココの経年変化の割合
(2020 年度～2024 年度)

＜釣り＞

釣り利用者における利用の心得及びシレココの認知状況の経年変化の割合を図 3-11 に示す。2021 年度と 2022 年度には 20%ほどの認知は確認されたが、釣り利用者のほとんどは認知していない状況であった。

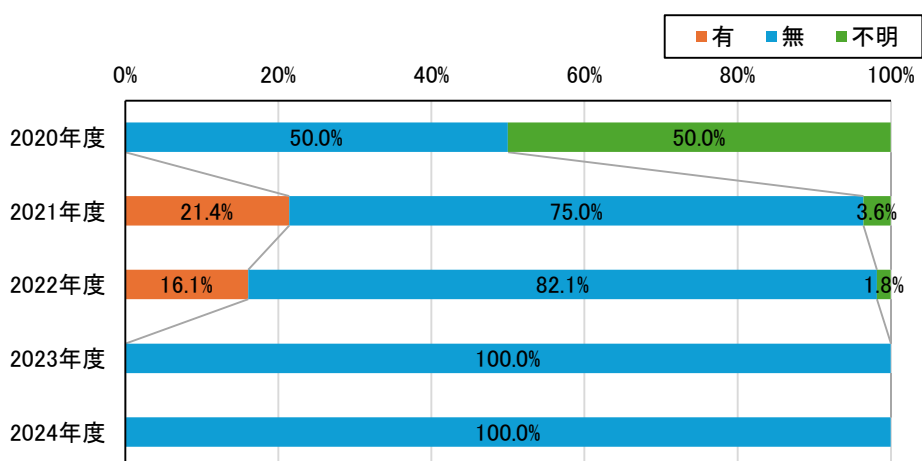


図 3-10 釣り利用者における利用の心得及びシレココの経年変化の割合
(2020 年度～2024 年度)

4. まとめと考察

2020 年度から 2024 年度における入域調査のとりまとめ結果

2020 年度から 2024 年度における利用形態の割合が、トレッキング 26.6% (61 組)、シーカヤック 10.0% (23 組)、釣り 63.3% (145 組) と先端部地区利用者の半数以上が釣り利用者であることが分かった。しかし 2024 年度においてはトレッキングと釣り利用者の割合は同様の結果であった。シーカヤック利用者は、過年度から大きな変化はない。シーカヤック自体がリスク及び難易度が非常に高いため、今後も大きな変化はないと考えられる。

ルサ FH への立ち入り状況についても、2020 年度からトレッキング利用者は 40~50%、シーカヤック利用者は 25~50%、釣り利用者は 5~30% と、最も多いトレッキング利用者であっても半分に満たない現状が継続されている。さらにレクチャー受講状況については、トレッキング利用者の約 40% が受講している一方で、シーカヤックや釣り利用者のほとんどがレクチャーを受講していない。

カモイウンベ川 - 観音岩間の日帰りトレッキングの需要

2024 年度の入域調査は、釣り利用者が減少した一方で、トレッキング利用者は過去最多の 18 組であった。従来のトレッキング利用者の傾向として、知床岬または知床岳方面の利用と考えられていたが、今年度は 18 組中 7 組がカモイウンベ川 - 観音岩間を目的に入域する利用者であった。これは日帰り可能なトレイルの需要が高く、調査期間外においてもその利用があった可能性が考えられる。現在、先端部地区の入域数は観音岩以北に設置された赤外線センサーを用いた入域カウンターのみであり、カモイウンベ川 - 観音岩間を目的とした利用者数の実態は把握できていない現状である。その中、カモイウンベ川 - 観音岩間のトレッキング利用者の 7 組中 5 組はヒグマ対策を講じていない結果であり、入域に伴うリスクに対する認識が十分でないことが懸念される。

釣り利用者の減少

今年度の釣り利用者の組数は過去 2 番目に低い 17 組であった。釣り利用者は 2022 年の 56 組をピークに、山型に推移しており減少傾向にある。その要因の一つとして、サケ類の遡上数減少が考えられる⁵。今後もサケ類の遡上数により釣り利用者が減少する可能性がある。その兆候として、知床白書に掲載された羅臼地区におけるサケ・マス釣り利用者数⁶と同様の傾向があることが表 4-1 から推測され、2024 年度も減少傾向になる可能性がある。

⁵ 知床データセンター 2023 年度第 2 回河川工作物アドバイザー会議 議事概要
(https://shiretokodata-center.env.go.jp/data/meeting/kasen_ap/r05/kasenap_R0502_gijiroku.pdf)

⁶ 知床データセンター 令和 5 年度 知床白書
(https://shiretokodata-center.env.go.jp/data/research/annual_report/R5annual_report.pdf)

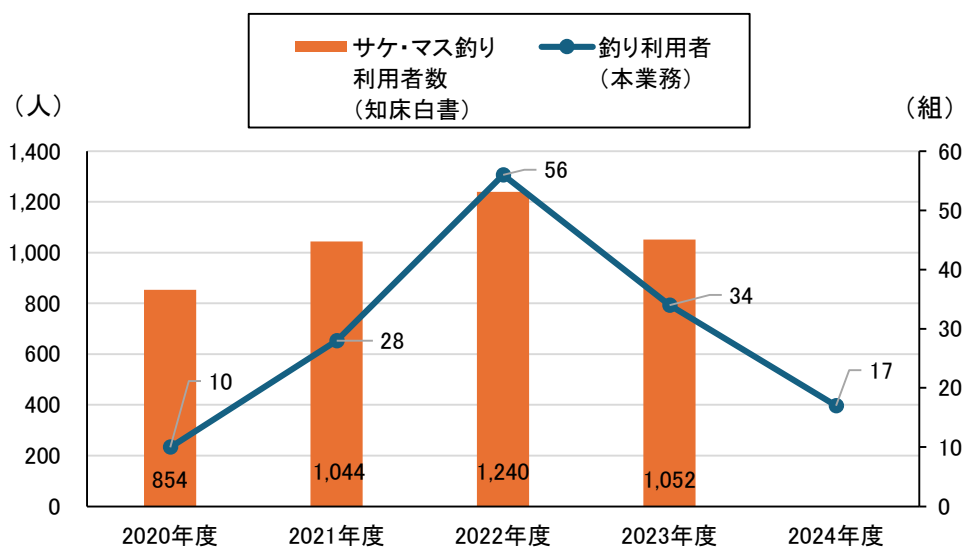


表 4-1 本業務及びに知床白書に掲載された
釣り利用者の動向（2020 年度-2024 年度）

また今年度の調査時には、オショロコマ釣りを目的に先端部地区へ入域している利用者が確認されている。経験則になるが、過年度の調査でオショロコマ釣りを目的とした釣り利用者は現状より少なかったと思われる。現在の調査項目では、シロサケやカラフトマスも同様に釣りの項目がひとまとめにされており、詳細な情報が把握できていない。

調査の在り方

トレッキングや釣り利用者は、知床白書に掲載されている利用状況調査で概ねの傾向を確認することが可能であるのに対し、本調査は先端部利用の詳細な変化を把握することに適している。今年度においても、カモイウンベ川 - 観音岩間を目的としたトレッキング利用やオショロコマ釣り等が確認され、過年度においても Stand Up Paddleboard（通称：SUP）利用が確認されている。

そのため前述の考察に踏まえて、本調査について以下の通り提案する。

- 過年度の状況を踏まえた調査目的の明確化とそれに合わせた調査項目の改定
- 調査項目に目的や目的地の記載（自由記載）
- 柔軟性をもたせた利用形態の記載（自由記載）
- 上記項目を踏まえての『移動手段』の削除

普及啓発の課題

2020 年度よりルサ FH への立ち入り及び利用の心得、シレココの認知度は思わしくなく、「利用の心得」の留意事項及び禁止事項等を認知せずに利用者が立ち入っている現状である。適正な利用を図る上で、利用の心得やシレココの認知度の向上が重要である。

さらに、2022 年度 4 月 23 日に知床半島沖で発生した観光船事故により、知床半島においてアクティビティリスクへの関心が高まっている一方で、実際に先端部地区を利用する人がヒグマや熱中症等のリスクを考慮した上で入域しているか懸念される。

利用形態が変化していることを考慮し、現状のシレココや WEB 発信とは異なる普及啓発を検討する必要がある。

卷末資料 1

知床半島先端部地区 利用状況調査表

2024(R6)年度 環境省事業 知床半島先端部地区利用状況調査業務 調査表 整理No.

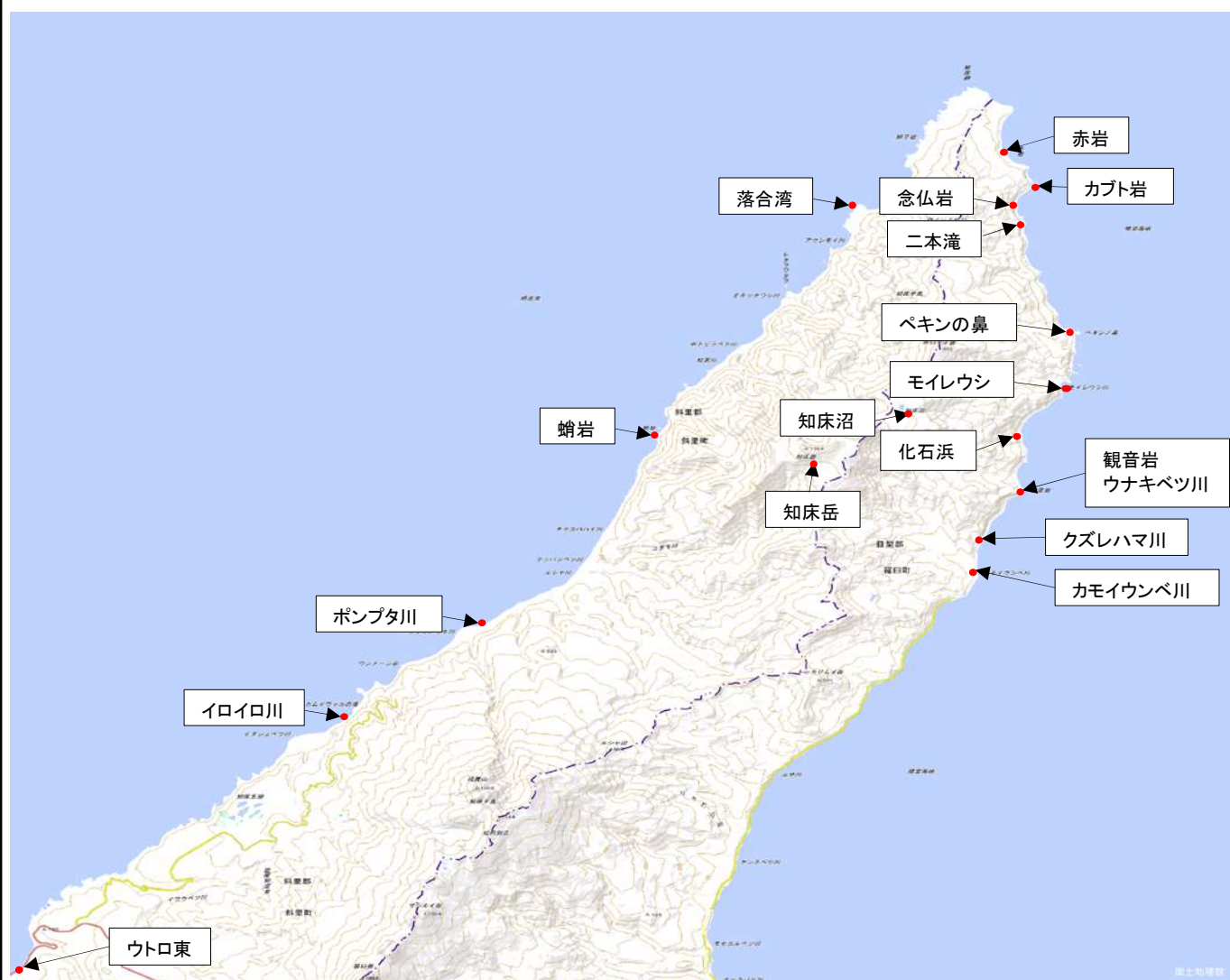
日時：2024年 月 日【：～：】 天気：晴・曇り・雨

場所：相泊

調査員：【】

★レクチャー受講者証No.			ヒアリング・目視
1-1	利用形態	トレッキング・シーカヤック・釣り・その他（）	
1-2	移動手段	シーカヤック・エンジン付きゴムボート・SUP・その他（）・不明	
2	ヒグマ対策の状況	有【スプレー・フードコンテナ・くまずず・笛・その他（）】 無・不明	
3-1	ルサFHへの立ち寄り	有・無・不明 【無の場合、理由を聞き取り(以下に記入)】	
3-2	ルサFH立ち寄り有りの場合	レクチャーを受講している。はい・いいえ 【”いいえ”の場合、理由を聞き取り(以下に記入)】	
4	利用の心得・シレコ	知っている・知らない・不明	
5	グループ構成人数	人（男：）人（女：）人	
6	★年齢層	10代（）人・20代（）人・30代（）人・40代（）人・50代（）人 60代（）人・70代（）人・その他（）人・不明	
7	居住地	北海道・東北・関東・中部・北陸・近畿・中国・四国・九州・沖縄 国内不明・アジア・ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニア・海外不明・国内外不明	
8	所属	個人・ガイドツアー・大学ワンゲル・社会人山岳会・マスコミ・その他	
9	自由欄	服装(色): 身長: 相泊までの移動手段: 車・バイク・自転車・徒歩・その他（） ザックのカラー: 入林簿の記載: 有・無 ※聞き取り調査後に入林簿の記載を確認すること 有の場合、詳細を記載 _____ 計画書の提出先: 入林箱・警察・海保・ルサFH・羅臼VC・車内 利用者指導: _____ 不適切な利用(たき火・ゴミの投棄・番屋への宿泊・釣り魚の投棄など) _____ 難所の状況変化(落石や崩落等)帰着時に確認 _____ ヒグマの情報(裏面に記載でもよい)帰着時に確認 _____	
		灰色部分は必ず聞き取りしてください。相手に余裕があれば、灰色以外の項目も聞き取りしてください。	
★		レクチャー受講者証を所持している方は、★部分のみ聞き取りをする。未記入箇所は、先端部レクチャー記録のNo.と照らし合わせをし、追記する。	

裏面に”10【移動経路、行動予定】”の記入欄あり！



泊 日 予備日 あり (日間) ・ なし

日帰り

1泊目

2泊目

3泊目

4泊目

5泊目

6泊目

7泊目

巻末資料 2

知床半島先端部地区利用状況調査

入域調査の結果一覧

No.	日付	人数	年代(人)					利用形態	ヒゲマ対策 の状況	ヒゲマ対策のグッズ				ルサFHへの 立ち寄り	レクチャー 受講の有無	利用の心得 シレココ の認知状況
			10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	クマスプレー	フードコンテナ	クマ鈴	笛	その他	その他詳細	
1	7月20日	1				1						○	○		催促スプレー	○
2	7月20日	2	2							○						○
3	7月20日	2			1	1				○		○			不明	○
4	7月20日	2	2							○		○			不明	
5	7月21日	2	1	1						○	○				○	○
6	7月21日	1					1			○		○			○	○
7	7月21日	5	3		1	1				○		○				
8	7月23日	1				1				○		○				○
9	7月23日	2	2		1		1				c					
10	7月23日	2		1			1									
11	7月23日	1				1										
12	8月15日	1				1				○		○		○	爆竹、ロケット花火	
13	8月15日	4					4			○		○				
14	8月15日	1			1					○		○		○		
15	8月15日	2	2							○		○				
16	8月15日	2		2						○		○				○
17	8月15日	6	1	1	1	1	3			○		○		○	○	○
18	8月15日	4	1	1	1	1	1			○		○		○	○	○
19	8月15日	3		3						○				○	○	○
20	8月16日	2			1	1				○				○	○	○
21	8月16日	1				1				○						
22	8月16日	2		2		1	1					○		○		
23	8月16日	3		3												
24	8月16日	1				1										
25	8月16日	4		4						○		○				
26	8月16日	4		2	1	1				○		○				
27	8月16日	1			1					○		○		○		○
28	8月16日	1				1				○						不明
29	8月16日	2		2												
30	8月16日	2			1	1						○				
31	8月17日	2				2				○		○				
32	8月17日	2			1			1		○		○				
33	8月17日	1		1						○		○				○
34	8月17日	2		2						○		○		○	○	○
35	8月18日	1			1					○		○				不明
36	8月18日	1			1					○		○	○			不明
37	8月18日	1			1							○				

令和 6 年度 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所 請負事業

事業名：令和 6 年度 知床半島先端部地区利用状況調査

事業期間：令和 6（2024）年 5 月 7 日～令和 6（2024）年 12 月 13 日

事業実施者：公益財団法人 知床財団

〒099-4356

北海道斜里郡斜里町大字遠音別村字岩宇別 531 番地



リサイクル適正の表示：紙へリサイクル可

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料（A ランク）のみを用いて作製しています。